

○フリース百年記念キノコ切手 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: The commemorative stamp for Elias Magnus Fries 1794-1878

フリース死後百年を記念するキノコ切手 6 枚が 1978 年 10 月 7 日にスウェーデンから発行された。その 1 週間後に早くも小倉謙先生からこれらを頂戴することが出来た。次のキノコが載っている。

Russula decolorans Fr. (和名なし); *Lycoperdon perlatum* Pers. (ホコリタケ); *Macrolepiota procera* (Scop. ex Fr.) Singer (カラカサタケ); *Cantharellus cibarius* Fr. (アンズタケ); *Boletus edulis* Fr. (ヤマドリタケ)。ホコリタケ以外の学名は何れもフリースが関係して居る。ホコリタケを含む腹菌類は、命名規約上ペルズーンを原点としているので、その学名は斯くなっているが、フリースの著書にはそのまま引用してある。*Macrolepiota* 属は現在アメリカ在住の Singer (1946) が設けたものである。菌種の撰択は常識的であり、是迄に何度も切手に用いられて来た。しかしその図柄と色彩、印刷は素晴らしく、従来のもものを群を抜いている。今一つの特徴は 6 枚が綴り合はされて切手帖に納まっていることである。表紙の表にフリースの肖像とヤマブシタケの線画が印刷されている。フリースの肖像は壮年時代と老境に入ったものと 2 枚が残って居り、嘗って拙著“分裂子” p. 49 に、後者の写真を転載したことがあるが、今回の線画はこれをもとにして向きを変え、顔面を正したということは、両者を比較すれば判る。ヤマブシタケを画いたことは大変面白い。自叙伝によれば、彼が 6 才の時母親に連れられて、山火事あとの森林にイチゴ採りに入ったところ、このキノコを発見し深い感銘を受け、これが動機となって菌類研究に志したという。表紙裏には作画、製版者等の名が明記してある、裏表紙の両面にはフリースの略伝と 6 種のキノコの概説が載っている。

スウェーデンではリンネやチュンベリーに関する記念印刷物は多いが、同じく自国の生んだフリースを顕彰することも忘れなかった。私はこれを大変嬉しく思うので、今少々蛇足を加えることにする。フリース家はその後、代々菌類を中心とする学者を出して居り、ウプサラ大学に関係して来た。地衣の Theodor Magnus Fries は彼の長男である。先年日本植物学会大会が東京目白の日本女子大学で催された際に、私は偶々スウェーデンから来日していた婦人の学者に引き合はされた。婦人の云うには、自分の夫 Nils Fries は現在ウプサラ大学の菌類生理学の教授で、初代のフリースの曾孫にあたり、その容貌は 4 代数名の者のうちで一番よく似ていると話して呉れた。さて 1977 年にフロリダのタンパの第 2 回国際菌学会の席でその夫妻に会うことが出来て、旧知のような思ひがした。同時に学問の伝統を大事にする彼国の国情をうらやましくも感じた次第である。

さてキノコ切手に関しては今一つ 100 というお目出度いことがある。それは 1977 年にニュージーランドからキノコを取入れた切手 3 枚が発行され、丁度キノコ切手 100 枚と

なったことである。私はそのうち97枚は集めているが、残りの3枚は大金を投じてもいいと思うもののまだその機会がない。現物は小倉先生から見せて戴いた。なほ余談ではあるが、1976年にデンマークの菌学者ハンゼン (Emil Christian Hansen 1842-1909) を記念する切手1枚が発行された。彼の著書 (Fungi fimicoli danici 1876-7) 出版100年の意味である。図柄には実験室内の姿が画かれてあり、菌は欠けているが、同時にコペンハーゲン大学で印刷した封筒には、糞生菌 *Sporormia pulchra* Hansen の顕微鏡図が載っている。

(国立科学博物館)

□日野 巖：植物怪異伝説新考 pp. 381, pls. 13, 有明書房 (東京), 1978, ¥6800。植物の種々の奇形、変形、怪異などについては、白井光太郎博士の「植物妖異考」が有名である (永らく絶版であったが、有明書房から1975年に復刻された)。ただそれは、さすがに古い書き方が、読みづらいと感ずるのは否定できない。それをずっとくだけた文章に直しただけでなく、新しいデータを加え、また順序をかえて序説、霊異篇、形異篇、色異篇、化異篇、妖異篇の六篇に分けて述べてあるのでずっと読み易く、また読んで楽しみを感じ易くなったのは私だけではあるまい。竹実満 (ちくじつみのる) などは多くの文献も加えられている。また「山姥の休め木」は *Cyphella pulchra* とされていたが、これに著者は疑問を持っていたところ、小林義雄博士が Kew にパークレイの原標本をたずねてその誤りを確認し *Corticium argenteum* Y. Kobayasi とした (1971) など中々新しいことのもっている。しかし全体としてみると、文献の出版は古い方に片よっているのは惜しいし、記事に今少し新しい見解や解説を加えてほしかったと思うのである。

(前川文夫)

○ミズバシヨウの新産地について (矢野悟道) Norimichi YANO: On a new locality of *Lysichiton camtschatcense* Scott

兵庫県養父郡大屋町加保坂にミズバシヨウの新産地がみづかり、現在300株余りの個体を確認されている。従来のミズバシヨウの南限域は、岐阜県郡上郡鷺村洞西の蛭ヶ野高原 (東経136°56', 北緯35°59') とされていたが、今回ミズバシヨウが発見された加保坂 (東経134°39', 北緯35°21') は、蛭ヶ野よりも更に南にあり、我国の西南限分布域にあたる。しかし、加保坂のミズバシヨウが果して自生であるか否かについては、更に充分な検討が必要であるので、1975年5月にミズバシヨウを確認して以来、1976年、1977年、1978年の3年に亘って、花粉分析学的調査、¹⁴Cによる年代測定、周辺および湿原の植生調査を行った結果、ほぼ自生のミズバシヨウであることの確認をえた。花粉分析の結果は既に、三好、矢野、波田 (Pollen analysis studies of moor sediments in Chugoku, Japan 3. Kabosaka moor (Hyogo Pref.). Bull. Hiruzen